

トランスリンガルの強み

～柔軟で資源豊かな社会と個人を作ることば
の教育にむけて～

尾辻恵美
シドニー工科大学

今日のはなし

トランスリンガルの強み:

柔軟で資源豊かな社会と個人を作ることばの教育にむけて～

グローバル化が進む中、人・ことば・モノの移動が顕著になり、社会や個人の多/複文化・多/複言語化が加速しているように見えます。しかし、その一方で、依然として近代国家主義的な枠組みが社会に深く根ざしており、言語（教育）観もまた、「ある言語をマスターする」という考えから抜け出せていないのではないのでしょうか。激動する現代社会のウェルビーイングのために、これからのことばの教育はどうあるべきか、みなさんと対話を通して考えていきたいと思います。

今日の話を聞くにあたって、 ちょっと考えてみましょう 1

自分の持っている言語観

言語とことばの違いなんですか。

ことばとは何ですか。

ことばはどこに存在すると思いますか。

ウェルビーイングのためのことばの教育は、どのようなものですか。

「ある程度日本語ができないとだめでしょ。」

その日本語とは何なのか

日本語を「マスター」することが
個人（社会）のウェルビーイングに繋がるのか

Myths

原始主義的なイデオロギーに基づく3つの神話 Canagaraja (2019)

1. 「～人」のように話せないといけない
 - * 「言語」を混ぜて話してはいけない。他のリソースを混ぜたり、使ってはてはいけない
 - * **完璧**な「～語」を**習得**させないといけない
2. 「～語」が先験的に存在する。本質的・固定的な言語観
 - * 言語を維持し、伝授 (transmit) できるもの
3. 国家、民族との強いつながり
 - * 「日本語」は「日本」や「日本人」が所有するもの、
 - * 「～人」としてのアイデンティティとしての「～語」

トランスリンガルの強み: 柔軟で資源豊かな社会と個人を作ることばの教育にむけて～

- 「ある言語をマスターする」個人や社会のウェルビーイングに結びつくのか
 - 「日本語」能力を身につけることを、社会統合や個人のウェルビーイングへの万能薬として処方しがちな日本語教育への疑問
 - 現代社会の多様性を考えるならば、言語一民族一国家の構図に織り込まれた「日本語」を教えることは個人(社会)のウェルビーイングを脅かす可能性もあるのではないか。
- 多様性を謳っているにもかかわらず、「言語」教育の裏に潜んでいる、排他的なモノリンガル・イデオロギーへ警鐘。
 - **イデオロギー** = 「人間の行動を左右する根本的な物の考え方の体系」

- 「ことば」とはなにか

- 言語イデオロギーの転回

- 第1のイデオロギーの転回：トランスリンガル・ターン
 - 第2のイデオロギーの転回：セミオティック・ターン

- ことばとはどこにあるのか

- ウェルビーイングに繋がる、ことばの教育への示唆

第一の言語イデオロギーの転回

トランスリンガリズム

モノリンガリズムに基づいた加（可）算的な「言語」



「ことば」 「言語資源」 「レパートリー」

Bi/Multilingualism

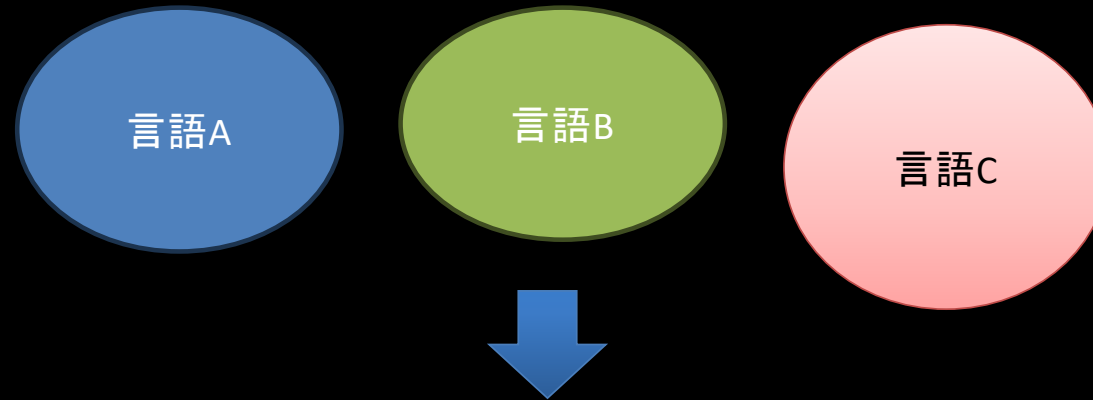


Translingualism

- 言語が国家や民族と関係しているという、（近代主義的な）言語理解から脱却した言語イデオロギーの更新
- 個別的、可算的な言語理解ではなく、一つの複合体としてとらえる。ことばをレパートリー、要素、資源、レジスターという単位で理解
- 言語のシステムではなく、プラクティス 言語行為に注目

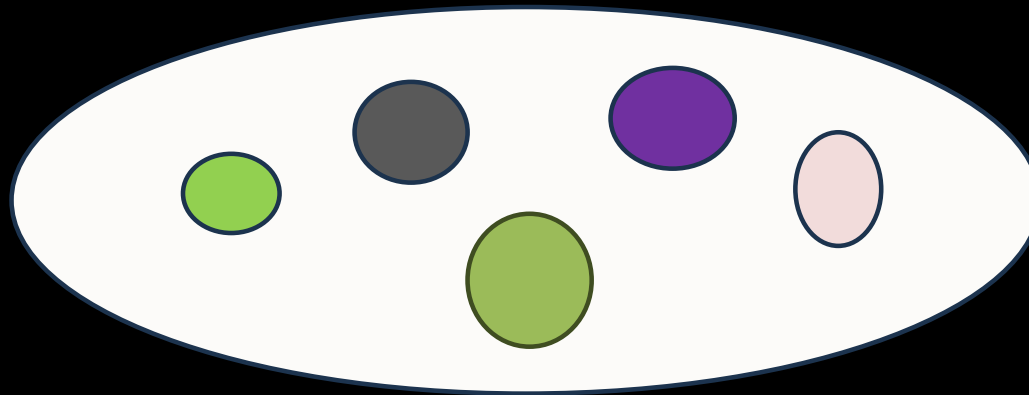
個別的、可算的な言語理解

マルチリンガリズム



一つの複合体としてとらえる。ことばをレパートリー、要素、資源、レジスターという単位で理解

トランスリンガリズム



TRANSLINGUALISM

Polylingualism (ポリリンガリズム) (Jørgensen 2008; Møller 2008)

Translanguaging (トランスラングエジング)
(Garcia 2009; Blackledge & Creese 2010; Li Wei 2011)

Translingual practice (トランスリンガル・プラクティス) (Canagarajah 2013)

Transglossia (トランスグロシア)
(Dovchin, Pennycook & Saltana 2017; Garcia, 2014, Sultana, Dovchin & Pennycook 2014)

Metrolingualism (メトロリンガリズム)

Polylingualism (Jørgensen 2008; Møller 2008)

‘What if the participants do not orient to the juxtaposition of languages in terms of switching? What if they instead orient to a linguistic norm where all available linguistic resources can be used to reach the goals of the speaker? Then it is not adequate to categorise this conversation as bilingual or multilingual, or even as language mixing, because all these terms depend on the separability of linguistic categories. I therefore suggest the term polylingual instead’.

(Møller, 2008, p. 218)

「もし話者が言語スイッチにおいて、異なる言語を並置して捉えていなかったら? そうではなく、**目的を達成するためにあらゆる言語資源を活用できる**というような規範に則っていたらどうだろうか。もしそうであれば、そのような会話をバイリンガルとかマルチリンガル、もしくは言語ミックスなどと呼ぶのは不適當なのではないだろうか。なぜならこのような名称は個別・独立的な言語のカテゴリーに基づくからだ。よって、私はその代わりにポリリンガリズムという表現を提唱する」。(Møller, 2008, p. 218)

第2の言語イデオロギーの転回

セミオティックスの転回 (Semiotic Turn)

セミオティック資源

ことばをレパートリー、要素、資源、レジスターという単位で理解

モノ、匂い、テクノロジー、ジェスチャー
なども含むマルチモダル、マルチセンソリーな意味生成に関わる資源

センソリー：感覚

- 意味生成:
- ことばとそれ以外のモードやセミオティック資源に同等の重きをおく
(Canagarajah, 2019, Hawkins 2018, Thurlow 2018)

メトロリンガリズム：言語と街

Metrolingualism: Language and city

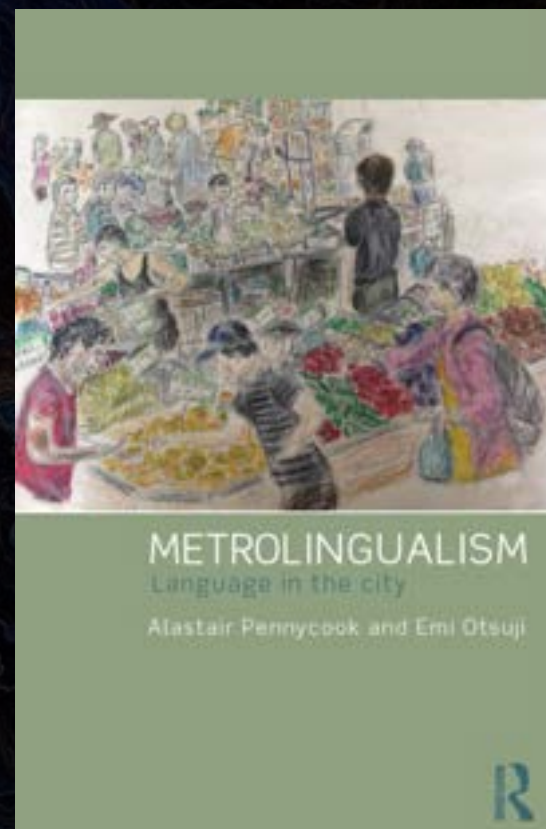
(Pennycook & Otsuji 2015, 2017, 2023)

(Otsuji & Pennycook, 2010, 2023, 2024)

尾辻 (2016, 2018, 2021, 2023, 2024)

- トップダウン vs ボトムアップ
- Multilingualism from below 草の根のマルチリンガリズム
- Everyday Multilingualism 日常的なマルチリンガリズム

様々な言語背景を持っている人々がどのように日常生活を営んでいるか。（キッチン、工事現場、レストラン、大学、市場、雑貨店、など）



メトロリンガリズム

Otsuji & Pennycook 2010, 2011, 2014, 2018a, 2018b)

Pennycook & Otsuji, 2014a, 2014b, 2015, 2017a, 2017b, 2018, 2019)

Metro vs ‘pluri’, ‘bi’ and ‘multi’

- ことばの接頭語 – 場（街）数量化を避ける
- 可算的に考えるのではなく、一つの複合体としてとらえる
- 言語⇒資源・レパートリー

「多」言語主義と街／場の関係を通して、「言語」に
対して新しい視点を提唱

- (x) 言語と言語（マルチリンガリズム、バイリンガリズム、コードスイッチ）
- (x) 言語と人（能力、個人の言語レパートリー）
- (O) ことばとスペース（街、日常言語生活）

メトロリンガリズム (2010, 2015)

メトロリンガリズムは言語、文化、エスニシティ、国籍、土地の繋がりを前提とせず、そのような関係がどのように作られたり、抵抗されたり、無視されたり、再構成されたりするかを探る。言語のシステムにではなく、相互作用の文脈の中からいかにことばが生まれるかというところにフォーカスを当てる。(2015: 246)

ことば:資源・レパートリーの総体

固定的、先験的な「言語」システム



1. インターアクションから生まれる、資源、レパートリー
2. マルチモダル、マルチセンソリー、マルチリンガルなど様々なセミオティック資源が複雑に統合されたもの

Semiotics: a means for **meaning** making

- 意味を作る手段
- 視覚、話し言葉、書き言葉、ジェスチャーや音楽の資源。また、それらが組み合わされたもの。

個 (Individualism & Representationalism)

VS

街、場所 (Metrolingualism)

- 言語は個人が習得し、個人の脳に存在する
- 個人のアイデンティティ、個人に存在する
- アイデンティティは言語によって構築される



メトロリンガリズム：

- ことばは、ある「場所」における相互活動の中で生まれる。
- 人、ことば、モノ、活動、政治、経済的要素が複雑に絡み合う街や「場所」における意味生成（セミオティック）過程に、注目する。
- アイデンティティは人間に集約されているものではない。

メトロリンガリズム

Otsuji & Pennycook (2010, 2011, 2014, 2018a, 2018b, 2021a, 2021b, 2021)

Pennycook & Otsuji (2014a, 2014b, 2015, 2017a, 2017b, 2018, 2019, 2020, 2021)

- Fixity and Fluidity: Ludic play (2010)
- Social Inclusion (2011)
- Spatial Repertoires (2014)
- Metrolingual Multitasking (2014)
- Metrolingua Francas (2014)
- Smellscapes & Sensoryscapes (2016, 2018)
- Semiotic Assemblages (2016, 2017, 2018)
- Assembling Artifacts (2017)
- Mundane Metrolingualism and Ordinarity (2013, 2019, 2020)
- Distributed language and identities (2022)

- 「ことば」とはなにか

- 言語イデオロギーの転回

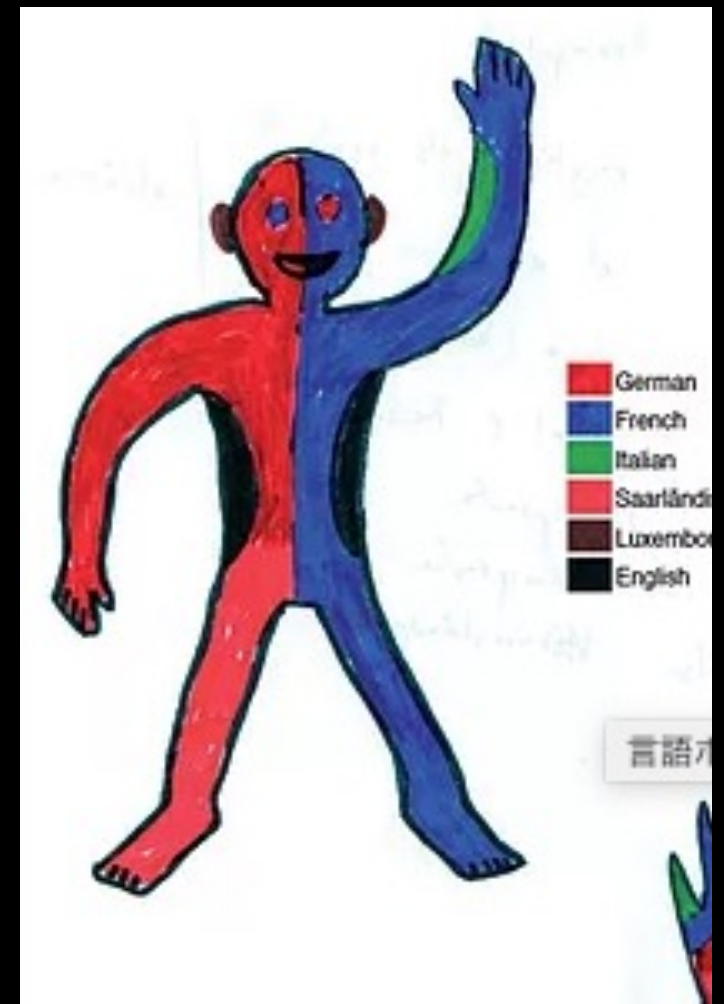
- 第1のイデオロギーの転回：トランスリンガル・ターン
 - 第2のイデオロギーの転回：セミオティック・ターン

- ことばとはどこにあるのか

- ウェルビーイングに繋がる、ことばの教育への示唆

ことばはどこにあるのか？

「ことばは、一方では
身体化 (embodied)、
内在化 (embedded)、
活用 (enacted)される。」

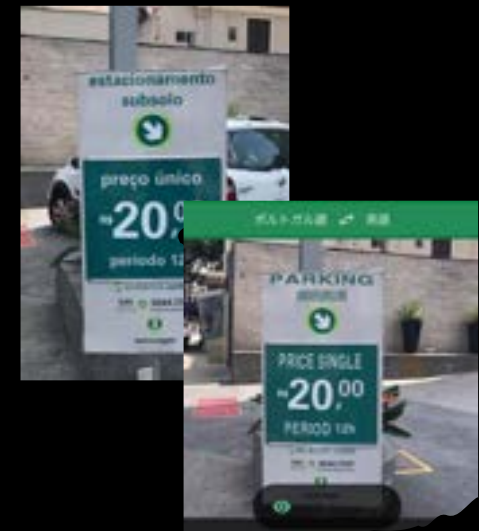


言語ポートレート

分散化されたことば

Distributed language and identity
(Pennycook & Otsuji 2022, Steffensen 2012)

ことばは、他方では場所に分散され(distributed)、状況にうめこまれている(situated)ものだ



ことば(尾辻 2020)

メトロリンガル的に解釈すると、言語使用、さらには「ことば」そのものは、**個人の中に内在している言語資源やレパートリーだけで成り立っているわけではないことになる。**よって、場や都市のレパートリーや多様性は、個と他の会話の参加者のレパートリーや、その場にある種々の資源を擦り合わせ、駆使しながら相互活動する中で生まれるその場の資源の総体であると考える。(尾辻 2020)。

分散化されたコンピテンシー(知識・能力)

- 個人の能力は、個人に内在し、個人的なものとしての習得されるレパートリー



- 能力は、個人のものだけではなく、場所に分散されたセミオティック資源を駆使しながら、社会的な相互実践(やりとり)によって生まれる。
- 「分散化されたことば」の視点はより包括的で分散的な能力を提唱する。
- 「能力」ってそもそも何？

Symbolic competence: Kramersch (2006, 2008)

象徴的能力: 「瞬時に色々な言語コードやそれらのコードと関連する時間や場をうまく操る能力」
(2008:664).

Performative competence: Canagarajah (2013)

実践的能力: 「単一の言語や方言を学習対象とするのではなく、教師は学生がトランスナショナルな接触の場で必要なレパートリーを駆使することができるようになる準備をさせる」(p.191).

トランスリンガ ルの強み

)あ



Otsuji, E., & Pennycook, A. (2018). The translingual advantage: Metrolingual student repertoires. In *Plurilingualism in teaching and learning* (pp. 70-88). Routledge.

Translingual advantage トランスリンガルの持つ強み

(Otsuji & Pennycook 2018:73)

トランスリンガルである学生たちが日常生活において、どのようにセミオティック資源、日常のタスク、そして社会的スペースを絡み合わせながら『草の根のマルチリンガリズム』、もしくはメトロリンガリズム的な活動を行っているかに焦点を当てる。

「特に、学習のプロセスにおいて、いかに多様なセミオティック資源が統合しているか、その役割に興味がある。」

ちょっと性のパラダイム・シフト： セミオティック資源の統合とエージェンシー

- 「欠けている・足りない」という理解に基づく伝統的な第2言語習得の考え方に波紋をなげる。
- 人々は様々な言語・セミオティック資源を組み合わせる様々な社会的な目的を果たす**主体的な行為者 (agentive actors)**である。(García, Bartlett, & Kleifgen 2009, Sunny Man Chu Lau, 2019)
- トランスリンガル・プラクティスの「トランス」とは、**トランスフォーメーション**を指す。(Canagarajah 2018: 32).

Li Wei (2016)
Translanguaging instinct

『私達は皆、人間としてのトランスランゲージをする本能があり、言語学習や言語使用のために、利用可能な認知、センサー(五感)、セミオティック、様々な様式(モデル)な資源を駆使する』

- 「ことば」とはなにか

- 言語イデオロギーの転回

- 第1のイデオロギーの転回：トランスリンガル・ターン
 - 第2のイデオロギーの転回：セミオティック・ターン

- ことばとはどこにあるのか

- ウェルビーイングに繋がる、ことばの教育への示唆

新しいパラダイムへ

(システムとしてのことば)

1. 独立的な言語
2. 形式的な能力
3. 個人的な営み
4. 同質的なスピーチコミュニティ
5. ルールと正確性
6. 言語システムのコントロール
7. 規定済みの文法
8. 形にフォーカス
9. 閉鎖的なモデル

実践としてのことば)

1. 言語ミックス
2. 日常のパフォーマンス
3. 社会的に達成
4. 接触のゾーン
5. 交渉のストラテジー
6. レパートリーの構築
7. 発生的な文法
8. エコロジーにフォーカス
9. 開放的なモデル

Canagarajah, A. S. (2007). Lingua Franca English, Multilingual Communities, and Language Acquisition. *Modern Language Journal*, 91/5, 921-937.

新しいパラダイムへ

(システムとしての言語)

1. 独立的な言語
2. 形式的な能力
3. 個人的な営み
4. 同質的なスピーチコミュニティ
5. ルールと正確性
6. 言語システムのコントロール
7. 規定済みの文法
8. 形にフォーカス
9. 閉鎖的なモデル
10. 言語は個人が習得し、個人に内在する

実践としてのことば

1. 言語ミックス
2. 日常のパフォーマンス
3. 社会的に達成
4. 接触のゾーン
5. 交渉のストラテジー
6. レパートリーの構築
7. 発生的な文法
8. エコロジーにフォーカス
9. 開放的なモデル
10. ことばは場所と活動と人の交渉の中から生まれ、分散されている

資源豊かな学生

日本語教育：

- モノリンガル・モノカルチャルバイアスが強く、日本語を使って、メインストリームへのアシミレーションという考え方強いのでは。
- 学生の豊富な視野や資源を活かし、批判性やエージェンシーを育てるようなことばの教育がなされているか。
- 実際に学生は様々な言語、セミオティック資源をつかって、日常生活を営み、言語学習をしているということを見逃しているのでは。

トランスリンガリムに基づくことばの教育 資源豊かになること

- 資源やレパートリーという観点からことばの教育に携わることにより、排他的になりがちなモノリンガル・イデオロギーに則った先験的な価値から脱却し、学生に新しい意味や、価値を作り出したり、解釈をするエージェントとしての可能性を見出す。
- ことばを広義に捉え、言語資源をはじめ、様々な意味生成に纏わる資源を駆使することができる、セミオティック資源の豊かな人となることがことばの教育の目的のひとつであると提唱したい。

研究論文

「言語のシステムが壊れちゃった！」

—個人と社会のウェルビーイングにむけて—

熊谷由理 (スミスカレッジ)・尾辻恵美 (シドニー工科大学)・佐藤慎司 (プリンストン大学)

現在、新型コロナウイルス、地球温暖化による自然災害、世界各地での紛争や戦争の影響で社会において、そして、教育の分野において、人々のウェルビーイングと社会的公正に対する注目が高まっている。本研究では、ウェルフェア・リングイステイクスと最近脚光を浴びているトランスランゲージングの概念を批判的に考察しながら、ウェルビーイングの内実についての考察を試みる。具体的には、米国の大学の日本語教室におけるある学生の事例を批判的談話分析の観点から分析し、彼女がモノリンガルイデオロギーに影響を受け、自らの混淆的な言語使用の葛藤や自己否定の経験をどのように捉えてきたかを明らかにする。分析結果から、ウェルビーイングは、必ずしもトランスランゲージングによって保障されるものではなく、個人の生活経験、親の信条、社会環境、時代背景などが複雑に関与していることが窺えた。この研究結果が言語教育に示唆することは、学生も教師もともに生きる社会の一員として、社会で優勢なイデオロギーを鵜呑みにするのではなく、常に様々な(言語)資源を駆使して対話と内省を重ね、よりよい社会のビジョンを思い描き、その実現に向けて行動することが大切であるということである。そのような行動は、個人のウェルビーイングだけでなく、社会自体のウェルビーイングにも貢献するはずである。

キーワード：ウェルビーイング、トランスランゲージング、批判的談話分析、対話、国際共修

ディスカッション

自分の持っているイデオロギー、 言語教育イデオロギーの再確認

自分はどのようなイデオロギーに則った言語教育をしているか。そして、将来したいか。

- ある「言語」を教えるという実践とどう折り合いをつけるのか。

自分の持っているイデオロギー、 言語教育イデオロギーがもたらすもの

どのような言語イデオロギーを学生に植え付け、再生産しているか。

- 自分の言語教育のイデオロギーがソーシャル・エクスクルージョンに加担し、個人と社会のウェルビーイングを妨げていないか。
- 学生の様々な資源を有効に駆使し、認めた教育をしているか。